

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第886号 平成27年2月24日

漂着

現在、北海道立文学館では滝上町生まれで北海道を代表する小説家、小檜山博氏の文学を紹介する特別展が開催されています。

会期は3月22日までで、この間、文芸講演会や朗読会等多彩なイベントが用意されていますので、是非多くの方々に足をお運び頂ければと思います。

私は、色々な機会に小檜山氏にお会いしていますが、その度に、小檜山氏からは自分を飾ろうとしない、野人のような強さを感じさせられます。それは多分に、小檜山氏が極めて貧しい家に生まれ、苦境に喘ぎながらも、小説家になるという夢を忘れず、ひたすら小説を書き続けて来て今日の地位を得たという自信の表れかも知れません。

小檜山氏の作品には、思わず胸を突かれ、目頭が熱くなるようなものが少なくありません。私は、ある時小檜山氏に、「良くあれだけの作品を書くだけの材料がありますね」と聞いた事があります。この誠に素人同然の質問に対して、小檜山氏は事も無げに「まだまだ書きたい事が沢山あって、次から次へと頭の中に湧いて来る」という答えを返され、「やっぱり、大小説家の頭の中は違うなあ」とつくづくと感じ入った事を思い出します。

ところで、今回の特別展は「野生よ 退化する現代を撃て」をテーマとしています。

「野生」とは小檜山氏の事であり、「退化する現代」とは、問題の本質を見ようとせず、ただ、見かけ上の豊かさに流されている現代社会を指しているのだと思います。

そういえば、2010年に出版された「漂着」という小説の帯にも「いま、野生が現代を撃つ」と書かれています。

「北海道の土と水でできているこの身体を北海道の自然へさらし、常にこの地の風土からの風圧を受けながら書く事で、頭でなく身体で書く事が出来る（2月4日付北海道新聞「北に生き 書き続ける」から）」と考えている小檜山氏からすれば、現代という社会は怒りの矛先であると同時に、愛して止まない対象なのに違いないと私は感じています。

「漂着」という作品は、滝上町のオシラネツプというところで農業を営む高松健三が主人公です。彼は、若い男と逃げた女房を探して札幌に出て来て、逃げた女房の写真と「とにかく一度、会ってくれ」と書いた幟を掲げながら三越の斜め前の歩

道で立っている内に、ひょんなことからテレビに出て評論家と論争する羽目になり、やがては、「百姓党総支配」に祭り上げられて選挙に出る事になり、当選はするのだが、最後は女房とよりを戻して滝上町に帰るといふ、いささか突拍子もない内容ではあります。しかし、小説の帯に「いま、野生が現代を撃つ」とあるように、健三の激しく、そして、怒りに満ちた言葉には私の胸をえぐるような力を感じましたし、それはまた、小檜山氏が現代社会に突き付けた問いでもあると思います。

「漂着」という小説は、滝上という田舎から札幌という都会に押し流され、漂い、そしてまたふるさとに戻って行くという物語ですが、もう一方では、自分達が今漂泊している事に考え及ばずに豊かな（と思っている）生活をしている現代人に対して、「お前たちは何処に行こうとしているのか」と問いかけているのだと強く感じます。

健三が「百姓党総支配」として、国会議事堂前で「食糧自給率を100%にしろ」という要求を掲げて入り込もうとしますが、当然警察官に阻止され、そこで、通行人に暴力を振るう羽目になり逮捕されてしまいます。その時警察官から暴行した理由を聞かれ「この去勢豚が俺に“日本に農民はいない”と抜かしたから睾丸を撫ぜてやっただけだ」と答えます。

「去勢豚とは何のことか」と警察官が重ねて聞くと、健三は次のように答えます。

「去勢豚」という表現に眉をひそめる方もいるかも知れませんが、少々我慢して健三のいい分を聞いて欲しいと思います。

「読んで字のとおり、金玉を抜かれて怒ることもない、いかなる抵抗もしなくなった豚みたいな人間の事だ。主に都会に多いけど、特に自分で自分の食う物も作らないくせにデカい顔をしているやつも去勢豚と俺は呼んでいるけど。国や政治家に税金を横領されて湯水のごとく私用に使われても黙っているやつ、年金をごまかされても笑っているやつ、輸入したハウレン草やギョウザにたっぷり農薬や洗剤をまぶされても何も言わんやつ。いまの日本人のカネもちが2割で、あとの8割は貧乏人だけど、なんとその8割の1億人近い国民の持っているカネを合計しても、カネもちと言われる2千万人の日本人が持っているカネより少ないというのに、怒りもしないし暴動も起さない1億人の間抜け。みんな小ゼニしか持っていないのに、携帯電話とデジタルテレビ持っているだけで自分を中流階級と自覚しているだけだ。そいつら去勢豚でなくて、何なんだ？」

この健三の叫びは、著者即ち小檜山氏の、自国の農業を大切にせず、食糧自給率40%という現実にも危機感を持たない日本国や日本人に対して、このまま流されて行けば、日本の漂着する先は亡国だという危機感そのものといつて良いと思います。

健三の定義からすれば、私もまた去勢豚との誹りを免れません。

（塾頭：吉田 洋一）